

翻訳者からの応答

長井 伸仁

長井です。私がこの翻訳の話を持ちかけた、という紹介が先にありましたが、それは確かです。自分自身は記憶の問題を専門にやっているわけでは全くなく、19世紀のパリの、主に政治史が専門ですが、なぜこの本の翻訳を考えたのかを簡単に説明させていただきます。92年から98年まで、6年ほどフランスに留学して、その時は自分の勉強をやっていたんですけども、同時にフランスに暮らすなかで非常に強く感じたのが、ノラもいろいろなところで言ってる「歴史ブーム」でした。私が文書館で史料を読んでいる時にも、家系調査を目的としてそれこそすごい数の人が来ています。また、テレビとか雑誌等のメディアでもそうだし、その他いろんなところで歴史ブームというのが感じられました。もちろん、コメモラシオン、記念行事も挙げられます。

フランスの国民的なアイデンティティの根底に歴史があるというのは、よく言われることです。19世紀の後半から20世紀の前半にかけての、共和政のもとで国民統合が進んだ時に、歴史学が重要な役割を果たした、というのは周知のことだろうと思います。その時の歴史と今現在の歴史ブームの「歴史」のは、なにか違うんだろうなあ、という感じを私は漠然と抱いておりました。そんな時に読んだのが、ピエー

ル・ノラの本です。私は「記憶と歴史のはざまに」を翻訳したにもかかわらず、誰よりも一番理解してないのですが、ひとつ面白いと思ったのは、過去との関わり方が現在変わっている、ということです。記憶と歴史という語はだいたい次のような意味を与えられています。記憶は、それがたとえ自分が経験したことでも、あるいは非常に古い時代のことであっても、過去の延長線上にある。あるいはその中にある、そういう過去との関わり方である。それに対して、歴史は、過去と決定的に断絶している、そういう断絶の上に過去がある。その違いをノラは、「記憶と歴史」という言葉で表したように思います。ノラがさらに言うのには、今日のフランスの歴史ブームというのは、実は歴史のほうである。つまり、マイノリティが自分たちの歴史を、あるいはフランス人がフランスの歴史を記憶として振り返るのではなくて、戦後の大規模な変化の中で、過去との決定的な断絶が生じ、その断絶のもとに、それこそ共有する文化遺産を見るかのように、過去を見ているのだ。失われつつあるからこそ、余計にそれをなんとか記憶しよう、という意志があるのだ、ちょっと私もうまく言うことはできませんけれども、そういう過去とのかかわり方なんだ、ということとをノラは言っているように思われました。

50 翻訳者からの応答

私は記憶とか歴史という言葉、あるいはその違いよりもむしろ、過去とどう関わるのか、という問題の方に興味がありまして、そういうところから現在のフランス社会にも関心を抱いています。この『記憶の場』という本に抱いた興味は、昔の、たとえば第三共和政期のフランスにおいて、当時の人たちは歴史をどう考えたか、それと現在とを対比することができないだろうか、そこから現在のフランス社会を歴史的に位置付けることはできないか、そういうことです。もちろん私は、全部の論考を十分に読んだわけでもなく、また、今言ったことについて、まとまった答えがあるとはかならずしも言えないと思いますが、いくつかの論考によると、ノラが言った「記憶から歴史への変換」がどうも起こったらしい、ということは分かるんですね。たとえばフランス革命の記念行事についての論考があります。それが書かれたのは1984年ですから、主に1889年の100周年、1939年の150周年が扱われているんです。1989年にフランス革命200周年については、パトリック・ガルシアという人の研究が2年程前に出されました。これらからうかがえることですが、やはり100周年のときのフランスと200周年のときのフランスとは大きく違っているようです。200周年のときのフランスというのは、たとえば、地方自治体による祝祭にしても、100周年のときにあったような右と左の対立は、もうほとんど出てこない。また、200周年のときの目

玉になったのが、7月14日のシャンゼリゼでのパレードで、そのパレードを演出したのは、アルベールビル冬季オリンピックの開会式を演出したグードという人ですけれども、シャンゼリゼ・パレードのテーマは、「世界の人権」でした。これはまあ、フランスあるいは共和政と直接には関係ないテーマでしたし、わたしも当時日本のテレビで中継されたのを見ていますけれども、確かに一般的に抱かれるフランスのイメージからはずいぶん程遠いものでした。そのような過去とのかかわり方の変化を通して、現代を見られるのではないかと、これがこの『記憶の場』に抱いた関心です。

しかしながら、もっと複雑ですし、さまざまな可能性も秘めているもので、そのことについては、本日のコメンテーターの先生方のコメントが、何よりも示しているところでしょう。それらも含めて、『記憶の場』を翻訳する意義を考えてみますと、非常に陳腐な言い方かもしれませんが、国民の歴史を、少し離れて見られるんじゃないか。その点については、岩崎先生が、それもまた形を変えた国民の歴史かもしれないと指摘されましたし、わたしもそれはそのとおりかなと思います。しかし従来のラヴィス的なフランス史（そのラヴィス的なフランス史自体、もう脱構築とか打倒の対象ではないかもしれませんが）とは、かなり違ったフランス史像が出てきたことは確かだろうと思います。もうひとつの意義は、その記憶の問題、と言います

か、安丸先生がおっしゃっていた、アナール的な研究成果がどのように活かされているか、ということなんです。ご存じのとおり、アナールが歴史人類学を掲げていた（今もしているんでしょうけれども）、その時の対象は、前近代であり、また都市よりも農村であったろうと思います。そのような前近代あるいは農村の記憶から、この『記憶の場』は、それを近代に、また都市に、あるいは農民ではなくエリートや中産階級にまで広げた。この意義は、積極的に認めるべきだろうと思います。

しかしそれにもかかわらず、やはりさまざまな問題点が目につくというのも、否定できません。「記憶」という言葉もそうでしょうけれども、とくに、なぜ「場」を対象とするのか、なぜ国民の歴史を脱構築化するのではなく、記憶の場を研究するのか、なぜフランスの記憶全体を、あるいはそのものを取り上げないのかという問題です。ノスタルジックであるという批判がなされることがしばしばありますが、目次を見ますとフランスのシンボルらしきものが並んでいますから、どうしてもノスタルジックだという印象が出てくるのかもしれない。牧原先生がおっしゃったように、場の間の関係、配置、構造などをこそ問題にするべきでしょうし、そのことがなされていないのは、この『記憶の場』のひとつの問題点といえると思います。また、これはジェラルド・ノワリエルが最近の本のなかでも指摘していることですが、た

えばエリートが「記憶の場」にしたものがどのようにして民衆なり労働者に押し付けられていったかという、社会階層間の関係も、これも論考によるとと思いますが、あまり強くは出ていない、そういう指摘がされています。私が読んだ限りこの指摘もある程度当てはまるのかという気がします。さらに、いくつかの場を取り上げることが正当化できるにしても、やはり取り上げる場が十分ではないだろうという問題もあります。たとえば植民地のことがほとんど出てこないとか、あるいは労働者のことがあまり出てこないとか、マイノリティのことが十分に上げられていないなどのことは不十分な点と言えるだろうと思います。

最後に、コメンテーターの先生方は外部から考える、あるいは外部も含めて考えるということをご指摘していらっしゃるように思いますが、そのことについて私が申し上げることができるのは、多分戦争の記憶のことだろうと思います。日本では戦争の記憶を取り上げることが、外部を組み込むことではないかと安丸先生がおっしゃいました。フランスでは、これも概説に属することですが、戦争こそが国民統合の非常に大きな契機になった。この点がやはり日本とは決定的に違うということだけ、申し上げておきたいと思います。第三共和政のとくに前半期に国民統合が進みますが、それを最終的に完成させ、共和政をフランス人のほとんどに受け入れさせたのは、やはり第一次

52 翻訳者からの応答

大戦とその勝利でしょう。そのようなことから、戦争の記憶の取り込み方やその意味は、日本と同じようにはなかなかならないのではないか。第二次大戦はヴィシーという、戦争とはちょっと違ったものがありますが、一次大戦について言うと思うでしょう。フランスは今でも外国からいろんな政治家なりが来ると（日本の平成天皇もそうだったらしいですが）、凱旋門の無名戦士の墓に行ってもらおうという習慣がある。そのような国ですから、その点で日本とは大きな違いがあるというふうに思います。

本当に支離滅裂な話で申し訳ありませんが、私からお話できるのは以上です。

(なかい のぶひと・徳島大学)